

十六歳だった彼女

沖縄県立開邦高等学校二年 賀数 ふき

十六歳の今を、私は友達と笑い合いながら過ごしています。毎日学校に行って、それなりに勉強をしたり、それなりに色々なことで悩んだり、落ち込んだり、でも楽しかったり。令和の幸せなJKは、今日も青春を感じています。

では、七十八年前に十六歳だった彼女は？彼女は友達と笑い合っただけで悩んだかかった、毎日学校に行って、勉強がしたかった、色々なことで悩んだかかった、落ち込んだかかった：彼女には友達と楽しく過ごす余裕も、毎日が戦争に奪われることに悩む暇もありませんでした。一九四五年のJKに、青春などというものは全くありませんでした。

私が彼女と出会ったのは、一年前の夏のことでした。親戚の家が平和祈念公園に近いこともあり、帰りに平和の礎で曾祖父父母の名前を探してみようということになりました。そしてようやく名前を見つけたとき、一人のおばあさんに声をかけられました。

「学生さんねえ？」

彼女はとても優しく、柔らかい表情で私に問いかけました。

「将来の夢はあるねえ？」

「あります。」

私は、自分の将来の夢についてもっと詳しく説明しようとしたが、彼女はまたもほほえんで、

「あい、よかったねえ。おばあの方も頑張ってるさあ。」

と言いました。私ははっとしました。彼女が私に質問したのは、「何になりたいか」が知りたかったからでなく、「将来に希望があるか」を知りたかったからなのだと思います。

私からも彼女に質問をしました。それはずっと私が知りたかったこと、

「当時は戦争に反対でしたか？」

「その頃は、戦争のことをよく分かっていなくてねえ。大人たちが戦争についていうからやってたよ。それが悪いことか良いことかなんて、考えてい

る暇はなかった。おばあにとってはそれが世界だったし、当然のことだったわけさあ。」

私の質問に、彼女は以前と全く違う表情で答えました。彼女の目の奥で、何かが揺れたように見えました。

『それが世界』『当然のこと』という言葉が頭から離れませんでした。沖縄戦が起きる前の子どもたちは、戦争がどんなに悲惨で愚かなものなのか知らなかったのです。そして、当たり前前に戦争をやる、人々の尊い命が失われていく状況を前にしても、「戦争はやってはいけない」と諭す人がいない、それが彼女にとっての世界でした。

彼女の目の奥で揺れたもの、それは、「あなたがこの歴史を伝えていきなさい。」というメッセージだったのだと思います。直接的な言葉をかけられたわけでも、たくさん言葉をかわしたわけでもありません。しかし彼女の言葉にできない、強く悲痛な願いは私に届きました。

戦争当時にJKだった彼女はもう九十四歳。同い年の人がどんどん亡くなっていくと聞きました。沖縄戦を経験した方が亡くなっていき、とうとう経験者が0になったとき、私たちは何をすべきでしょうか。

私たちが何もしないと選ばれるなら、次の世代の人たちは戦争のおそろしさを知る由もありません。また彼女のように、『それが良いことか悪いことか』分からないまま巻き込まれてしまうのでしょうか。

七十八年前の沖縄戦。海は人々の血と涙に染まったはずなのに、今はその跡型もありません。私はそれが怖いのです。

私たちがこの悲劇を語り次いでいくだけで未来は変えられます。彼女のような優しく尊い人が何も知らずに、何が何だか分からないまま幸せを失うのは決して許されません。私たちは戦争の悲惨を忘れないために、ずっと次へ次へと受け継いでいかなければなりません。とうとう消えてしまいうような傷ましい記憶は、私たちが平和の波を広げていくことで永遠と残り続けます。

十六歳の頃の彼女は、「今」を必死に耐え抜きました。そのおかげで、十六歳の私は今、戦争の恐ろしさを考え、記憶をつないでいく決意ができました。彼女に出会った経験は一生の宝物です。